

近年、幕末から明治初期を舞台にした作品を手掛ける漫画家の高浜寛さん＝熊本市中央区



19世紀末 考証資料は語る

休館中の熊本市現代美術館（同市中央区）は、「高浜寛のマンガに登場するアイテムで読み解く19世紀末展の紹介動画を公式ホームページで公開し始めた。動画では、国内外で活躍する同市在住の漫画家高浜寛さん（43）が、漫画を描く際の時代考証で集めたアンティークなどを担当学芸員らと対話しながら解説している。歴史漫画家としての自覚も芽生える気鋭の作家に、制作にかける思いを聞いた。

（魚住有佳）

休館中の熊本市現代美術館 動画公開 収集品を解説「今が見える」

コーヒークップ、ビスケット、香合…。出品する時代の「証人」たちは、高浜寛さんが当時を想像しながら愛用する「日常のパートナー」だ。「かなりのアイテムが撮影されている。来場できない方にも空気が伝わるのである」

休館中でも楽しめる動画は、崇城大芸術学部男子学生が制作。手書き解説を添えたアンティークのほか、メモの付箋が貼られた古地図、1878年頃の世界情勢をまとめた年表付き図表も登場する。作品の舞台となる現地を訪ね歩き、文献や写真など多くの資料にあたる徹底した取材がりが伝わる。

「取材が進まないうちは細部を決めない。ストーリーは後から自然に生まれてくる。歴史が語りはじめ、みたいに」

近年、幕末や明治初期の日本にフォーカスした漫画を手掛ける。日本人の生活様式や思想が大きく変わり揺れ動いた19世紀末は、重要な転換期だと捉える。「当時の日本人が持っていて、現代の私たちが持っていないものは何か。考えながら作品や展示を見てもらえる」と面白いと思う。

たかはま・かん 筑波大芸術専門学群卒。デビュー作「イエローバックス」は米誌でベスト・オブ・ショートストーリー賞受賞。「エマは星の夢を見る」など作品の多くがフランス語を中心に翻訳。チベットの社会問題を伝えるグライ・ラマ14世公認のプロジェクトとして、フランスの出版社から10代向け漫画を今秋刊行予定。



休館中の展示会場に並ぶ、漫画家の高浜寛さんが時代考証のために集めた19世紀末から20世紀初頭の懐中時計やランプなど

2010年ごろまでは小説的な作品が続いていたが、心身が安定し始めた頃に、出版社から勧められたのが歴史漫画だった。「他の時代、他の文化、他の階級…。病んでいた頃には欠落していた『他』への興味が湧いてきた」

取材を深め、調べるほど19世紀末にひかれていった。「近代化で、日本人のアイデンティティーは緩やかに確実に希薄になった。物質を得て精神を失ったと言えるかもしれない。当時を調べることで、今の私たちが何をすべきか、見えてくるような気がする」

そうして生まれたのが、幕末の長崎に生きる花魁が主人公の「蝶（ちょう）のみちゆき」（第20回手塚治虫文化賞マンガ大賞候補）、明治初期の長崎とパリが舞台の「ニコスの角灯」（第21回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞。月刊コミック乱で連載中の「扇島歳時記」では開国後の長崎・出島の人間模様を描く。いずれも企画展で紹介されている。今後は天草・島原の乱をテーマにした作品制作も考える。時代だけでなく、古里を拠点にした新たな創作活動も目が離せない。「いずれは天草で漫画の私塾も開いてみたい」

※高浜寛さんの企画展は7月5日まで会期を延長。開館が決まり次第、再編した展示で始める。